『ドラキュラ』というテクストあるいは 19世紀西欧における人類学と進化論的状況 —Victorian Eraの思想的断面—

関　三　雄

ドラキュラはブルジョワの世紀の
最終生産物であると同時にその
否定でもある。[1]

Ⅰ

ドラキュラDraculaを巡る言説は、主に二つに分裂している。しかもそれらは重層している。本論考はヨーロッパの人類学的「眼差し」gazeについての試論である。またそれは、ドラキュラ表象に深く関与している。すなわち、本稿は吸血鬼伝承の民族誌的実像を構築するものではない。なぜならば、ドラキュラ表象はいわゆる「民族誌」ethnographyではないからである。なぜ、それは民族誌とはよべないのだろうか？それは『ドラキュラ』[2]が誕生する社会思想的状況に関係しており、あくまでも西欧イギリスが東欧に投げ掛けた眼差しに焦点を合わせているからである。小説『ドラキュラ』の主人公ドラキュラ伯爵は架空の人物である。一方、ドラキュラと呼ばれたヴラド３世（串刺し公）は歴史的に実在した。しかも、彼の地トランシルヴァニア（現ルーマニア）には吸血鬼伝承が根付いていたが、ドラキュラ公が吸血鬼であったという伝説はない、といった錯綜とした虚実情報がこのテクストを巡って展開してきたのである。

19世紀の西欧、殊にイギリスでは人類学の歴史の上で重要な時期とされる。なぜなら、「近代的人類学の祖」としてのタイラー（Tylor, E. B.）が大学ではじめて教授職に就いたからである。実はこのアカデミックな人類学の黎明期のイデオロギーと『ドラキュラ』の世界観は同時代の認識論を共有していた、と私は考えている。そこで、まず人類学の生成の意味から出発しなければならない。まさしくそれは、進化論の時代だった。

Ⅱ

人類学は西ヨーロッパを中心に発展してきた。ヨーロッパとは「西」ヨーロッパのことであった。もちろん、東、北、及び南はヨーロッパではなかった。人類学の歴史は、ヨーロッパが他者へ向けた眼差しであって、自画像である。他方、人類学的テクストの産出は、自他の相互作用の結果でもある。ヨーロッパの人類学者は、「未開社会」を研究対象とした。少なくとも、それはある種のイデオロギーであろう。しかし、彼らはそのことに気づかなかった。

ところで、未開社会primitive societyは果して実在するのだろうか？実は、「ノー」と答えるのは困難である。いま「イデオロギー」と言ったばかりなのだが。一方で、われわれはイデオロギーから自由ではあり得ない。別に開き直って強弁しているのではない。言うまでもなく、それを「偏見」とわれわれは呼んできた。それは自文化の「常識」のことである、と。この程度であれば、人類学的知見に通じていなくともまさしく「日本の常識」であろう。では未開社会とは現代社会の一類型なのだろうか？もちろん、ノーである。「伝統社会」と言い換えても、事態は変わらない。イギリスの人類学者クーパー（Kuper, A.）は、

自省的で思想史的な視野を保持した研究者である。彼は、「未開社会」は発明された、と断定する。あるいはまた、primitive societyという概念を創出したのは「罪」sinとまで言い切る。しかし、それでは現在までの人類学的営為を否定することにはならないだろうか。言うまでもなく、クーパーはそのことを百も承知で「思想」を吐露するのだ。

> 人類学の伝統的な歴史では、擬似哲学的な一連の諸理論―進化主義、伝播主義、機能主義、構造主義等―が記述される。各々の理論は短期間君臨し、そして粗雑に投げ捨てられたのだ。しかもこれらの総ての理論的伝統は未開社会という同一の観念を唱えたのである。
>
> （Kuper　1988:1）

と、未開社会というアイディアが人類学の主要な学説・理論に根深く続いてきたことに注目する。特にこのイギリスの人類学者の槍玉に上がっているは何も旧臭い過去の遺物のような理論ばかりではない。確かに「ポスト構造主義」が叫ばれてからかなりの年月が経過した。しかし、レヴィ＝ストロース（Lévi-Strauss, C.）に代表される構造主義は捨て去られたかもしれないものの、乗り越えられたという形跡はない。ここにも、クーパーの「経験主義者」の知的伝統を読み取ることが可能だろう。つまり、構造主義はフランス流の演繹主義の臭いを嗅ぎつけたと言えなくもない。ともあれ19世紀の後半から胎動してきた「学問的人類学」が、研究対象として「未開社会」を措定したのは間違いあるまい。

人類学が未開社会を必要としたのであれば、それは発明に至るのは必然であろう。「必要は発明の母である」と言うではないか。だが、コトはそう単純ではない。「発明したから必要になった」という逆の論理も成立つ訳で、人類学が「未開」社会を発明したからこそこの眼差しに拘泥することにもなったのである。では、西欧の人類学が想定した「未開」primitiveとは、如何なる概念だったのだろうか。語源学詮索はここでは行わない。が、知の社会的背景を視野に入れなければこの問題には接近できないであろう。なぜならば、人類学的思考の系譜は、前身たる民族学ethnologyを包摂して、西ヨーロッパの社会的展開に伴う世界観並びに人間観の再構築という社会思想史的軌跡と同一だからである。言い換えれば、西欧諸国の「植民地主義」colonialismとその帰結たる「帝国主義」の社会的展開と不可分に結び付いた、この人類学の発展はアンビヴァレントな思想性を学問に内在させていたのである。要するに、19世紀のイギリスにも「異なる人間」の情報が怒涛の如く間断なく流入した筈である。それを彼らの「世界」cosmosの拡大と言っても矛盾はない。

従って、大英帝国、即ち19世紀のヴィクトリア朝が人類学的中心を形成していたのは不思議ではない。クーパーが明言する（1988 : 7）ように、今日の人類学的常識から逸脱した「偏見」＝認識論が罷り通ったとしても何ら驚くこともなかろう。「歴史は常に現代史である」からである。さて、現代の、つまり、今日の人類学者はクーパーが楽観した状況にあるのだろうか。性急な結論をこの場では避けておこう。ただ人類学者を偏見自由の「知の特権階級」にするならば、その者は脱構築の技法を学ぶ必要があるだろう、と私は考える。エスノセントリズムには、人類学者は確かに他のどの学問分野の研究者よりも敏感であろう。それはある種の「獲得形質」である。しかし、人間は常に意識的言動をする訳でもない。

未開社会は「普遍的過去」として認識された。即ち、われわれの過去である。この「われわれ」とは誰か。勿論、ヨーロッパ人という暗黙の前提が意識に潜在化している。19世紀西欧が進化（論）主義evolutionismに彩られているのは、故なきことではないのである。民族学＝人類学が既存の学問に対するある種のアンチテーゼとして発展し、しかも一個の

学問分科として自立＝自律して来る19世紀であるならば、この学問が進化論を身に纏うのも時代の空気を呼吸すればこそ当然であろう。つまるところ、primitiveとは原初的あるいは原始的といった意味の翻訳可能な状態を指す言葉である。日本ではほぼ「未開」と訳してきたが、文明以前という意味では同一である。確かにフランスやイギリスは「非ヨーロッパ情報」にアクセスするのは優位な状況であった。それには既に触れた。この時代現象をコスモロジーの次元で捉えるならば、「自画像」を描きながら「他者像」あるいは「人間像」を描写していると勘違いしたことになろうか。クーパーは言う。「人類学者たちは、この未開社会を彼らの専門主題として取り扱ったが、実際のところ未開社会は歪んだ鏡に映った彼ら自身の社会（彼らが理解したままの）であることを証したのである」（1988 : 5）と。

クーパーは著名な社会思想家たち、マルクス（Marx, K.）、ウェーバー（Weber, M.）、テンニェス（Tönnies, F.）並びにデュルケム（Durkheim, E.）らが、「伝統社会」からの変革した新しい時代を意識して概念化し、更にその背後にあるものとして未開社会を区別したと見ている。この伝統社会の背後の未開社会を人類学者が取り込んだことになるのである（Kuper 1988:5-6参照）。「歪んだ鏡」を媒介とした自画像の構築、それほどこの時代の西欧は揺らいでいたのである。そのような視野から見れば、ヴィクトリア朝の大英帝国は、政治＝経済的発展・安定とは別種の相貌を内部に胎胚していたと言えるであろう。

> ［未開社会という観念］の誕生は、後期ヴィクトリア朝の帝国主義のうねりと関連があるであろうし、またその最後の20年間におけるおそらくは終末的没落が帝国の最期と関係しているだろう。ナショナリズムの勃興と衰退は多分等しくこのことと関連がある。
>
> （Kuper　1988:9）

ここで、気鋭の人類学者は自国の政治的動向と人類学上の観念の帰趨とに眼差しを向けている。周知の如く、ヴィクトリア朝の時代は1901年で終わる。時代の相貌を政治経済的繁栄で語ることでは十分ではない。繁栄に内在する要因自体から生起する矛盾の顕在化によって、国家社会は衰退の様相を帯びることになる。少なくとも、Victorian　Eraは後期には帝国に翳りを見せ始めていたのは否定し得ないであろう。改めていうまでもなかろうが、「世紀末」という意識が同時代表象として立ち現れたのは19世紀以前にはなかったのだ。先鋭なる芸術思潮と学問動向は、深層への眼差しを表層の戯れという形態で予兆するのではあるまいか。進化論の思想は19世紀に始まったのでないが、生物学と人類学（民族学）という「近代的人間像」への問い掛けを指向する学問領域で明確化したのは意義深いことであった。それぞれが、「人類外」と「ヨーロッパ人外」といった、いわば「他者」を「自己＝ヨーロッパ人」とを結び付ける試みだったからである。他方、この新たな時代意識を過剰に評価するべきでもなかろう。「primitive societyという幻覚の執拗性」（クーパー）に汎時代的側面がありうることを見落としてはならないからである。

ところで、ここまで私が縷々述べてきたのは、（西）ヨーロッパ社会が生み出した「未開」という他者認識の技法を学問的意匠として立ち現れた人類学が、眼差しを向けたこの社会が実は実体を掬い上げたというよりも、その眼差しによって発明されたものだったという人類学者クーパーのアイディアについてであった。クーパーの言説は、大英帝国の歴史を彼自身が背負っている者として自省的発言となっており、その意味では説得力がある。但し、この論考のパースペクティヴとは必ずしも同期しない。なぜならば、本稿の目的は人類学の学問としての軌跡を内的に辿ることではなく、あるいは民族学あるいは人類学的展開に国家と政治の運動に連関させることでもない。そうではなく、かつて「人類学的思

考とロマン主義の精神」[3]との同型性を論じたように、ある社会が時代的制約を受けながら、それも多数派の思想とは必ずしも同調しない精神的な動きが、芸術や学問という現存する社会への批判的眼差しを多様な意識形態として提示する、その運動に私は注目したのである。そのような画期としてヴィクトリア朝イギリスはその事例となろう。

Ⅲ

もう少しテーマを尖鋭化しよう。どのような学問にも「前史」prehistoryがある。もちろん、今日文化人類学あるいは社会人類学と呼ばれる学問分科にも前史があった。そして「集合表象としての他者意識」が人類学的思考を特徴づけるものであった。その意味では、この他者意識は遍在する集団的自画像の試みであって、どの時代どの地域にも存在し得る。ただ今日の時代に至る発展形式としての自立した学問という観点からすれば、他者意識あるいは認識をコスモロジー＝世界像に積極的に取り込んできたのは西欧生まれの人類学であったとは言えるであろう。従ってその前史も長い。19世紀に漸く体裁が整ったとする必然性はない。成る程、1839年にパリで、1843年にロンドンで学会が成立する。イギリスのそれはフランスに倣ったようである[4]。The Ethnological Society of Londonがイギリスでの名称であり、この民族学という名称は「大陸」の伝統の中で培われたものであって、イギリスでは馴染みがなかった。それに比べれば、フランスなどでは現在でも例えばレヴィ＝ストロースを民族学者Ethnologueと呼ぶこともある。ともあれ、19世紀の前半に今に繋がる学問の組織が成立したとはいえ、そのことで学的パースペクティヴが一気に整序されたと考えてはならない。そうではあるが、「人類学の／という思想史」を目論んでいる私には、primitive を必要とした知的土壌が確実に醸成された点は看過できない。要するに、進化論の時代は時間意識の高揚したeraだったのである。

このようなプロブレマティックに呼応した19世紀末イギリスに執拗に拘る研究者に冨山太佳夫がいる。彼は通常の意味で「英文学者」ではない。『ダーウィンの世紀末』[5]はこの大英帝国の孕んだ多様な矛盾を精神史的に析出しつつ通覧する。

> 遠い国からもち帰られた思い出の品としての資料が人類学の成立に貢献したことは、説明するまでもない。過去という時間を抜きにしては考えられない学問が、地質学、人類学、歴史学、比較言語学などが、そしてとくに進化論が本格的にかたちをなすのは、この時代のことである。しかも、過去への関心を活力の源として成立した学問が、その成果を一般の人々に提供し、人々の過去への関心を増幅するということもした。
>
> （富山　1995:16-17）

この引用部分には登場しないものの、富山がこの論集の統一題名として与えたダーウィンは当然、シンボリックな位置を本著作＝テクスト上で占めている。改めて言うまでもないが、進化論は時間の理論であると同時に、「空間の理論」としても機能した。人類学的言説を施すならば、過去は異地にあり、それをprimitiveと名づけた。進化論は常に悩ましい誘惑的な理論だった。つまり、人類史の再構築という気宇壮大な知的プログラムを実践する技法には違いないからだ。但し、それには前提条件があった。「われわれ人類（ヨーロッパ人）の過去」がヨーロッパ外の現在に残存している、とする前提である。そうでなければ進化論は根拠を失うであろう。ダーウィンの生物進化論も例外ではあり得ない。もちろん、ダーウィンは人類以外の生物進化を考えた訳ではないからである。

それでは、クーパーが力説する「未開社会」の発明とダーウィンの進化論といった19世紀のヴィクトリア時代のイギリスに蔓延した知的気分はいかなるコロラリーを産み出した

のだろうか。実際のところ、この時代は一方では華々しい経済発展の状況を創り出していた筈である。ただそれを単純に「進歩」progressというイデオロギーで一纏めにできない人びとも居たのである。件のクーパーが行った講義[6]で「人類学の原罪は世界を文明と野蛮に分けたことである」（Kuper 2008:717）と率直に述べた。この野蛮は原語ではsavageで、これはprimitiveと置き換えが可能であろう。即ち、クーパーが敢えて原罪として認定した人類学的知の基盤は、対象となった社会の特質ではなかった。認識地図は「図」と「地」との関係から常に構成される。この記号論的言説は、この場合にも当て嵌まるのである。ヴィクトリア時代の英国を含む西欧世界はどのように「異なるもの」を呑み込んだのか。そして、それはどのように再構築されたのか。富山が言うように、学問的情報が学界外の一般社会に流れ出し、それが社会の想像力を刺激するとき、「文明」側の人びとは既に「野蛮」を発明していたかも知れないのだ。この場合、多くは対象となった、つまり眼差しを向けられた側＝「地」は、投げ掛けられた眼差しの意味を忖度するが、「図」の方は無頓着でその意味に鈍感である。クーパーの言を引き合いに出すまでもなく、「文明」と「野蛮」という具合に分節化したのは「文明」に属する人びとに違いあるまい。人類学の世界では言い古されたエスノセントリズムは、非人類学的謬見を無意識的に保持する人びとの精神の在りように向けられるが、実は人類学的思考が生み出したものと言っても不思議でも何でもない。逆に、人類学だけが批判されるものでもなかろう、と思う。富山の炯眼はそこを衝く。

> ダーウィニズムおよびそれを社会現象に適用したものとされる社会ダーウィン主義のきわ立った特徴は、自然科学の理論としては、またそれに依拠する社会学説としては、きわめて異例とも言えるほどの短い時間のうちに、十九世紀の文明社会に大なり小なり受けいれられてしまったという点である。・・・人間個人のレベルではきわめて理解しにくいはずの進化の説が・・・・、一八五九年の末に公表されて以来、わずか十年ほどで公認の説となり、社会現象にまで拡大されてゆくというのは、それが誰も予測できない意外な説であったのではなく、暗黙のうちに社会が期待していた説であったことを物語っているのではなかろうか。
>
> （富山　1988:216）

まさしく、生物学の著作『種の起源』が、自然科学のテクストでありながら広範な社会的影響力をもつ異様な情況に，当時のパラダイムを読み取ることができる。進化論は「社会が期待していた説」かどうかを検証するのは容易いことではない。しかし、フランスでは既にコント（Comte,A.）の社会発展論が公刊されている。従って、そのような19世紀西欧の時代精神を集約的に「社会ダーウィン主義」と呼んでも、差し支えないであろう。要するに、「社会ダーウィン主義というのはダーウィンの言説から引きだされたものではなくて、十九世紀の西洋の社会を動かしていた緒力に与えられた総称だ」（富山　1995:216）といった結論が導きだされる。クーパーが人類学に与えた直接的な作用は、ダーウィンではなくてメイン（Maine, H.）であると言ったとしても、それは大きな問題ではないのである。様々な水準で、進化論的なイデオロギーが浸透していたのであって、民族学＝人類学の名目上の確立はその流れに棹差す出来事と言うべきであろう。

Ⅳ

植民地主義的政治・経済の発展は、情報流通の次元から捉えるならば、大量の「異世界」情報の流入を意味する。それが人類学あるいは人類学者を生み出す基盤となる訳であるが、

富山が喝破した如くそのような情報は専門家・知識人だけの占有物ではなかった筈である。そうでなくては、「社会ダーウィン主義」があれほど容易く社会に受容されることもなかったであろう。言うまでもなく、このことが人間観、世界観要するにヨーロピアン・コスモロジーに揺さぶりをかけるのは当然ではなかろうか。

*Victorian Anthropology*の著者ストッキング（Stocking,Jr.,G.W.）は、「過去」ないし「残存」を進化論的に整理する方法を示唆する。但し、クーパーなどと左程異なるところはない。それも当然のことであり、ただ敷衍化しているに過ぎない。彼の議論に耳を傾けよう。文明civilizationなる語についてである。これに関わる語はギリシャやローマに戻るとして興味深い発言をする。まずBarbarianという語。続いてSavageである。

> 「野蛮人」Barbarianという語がギリシャ語に由来し、この言葉は明敏にわかりやすく話した人びとと、その言葉がただ単純にもぐもぐを繰り返していると思われた、都市生活の範囲外で暮らす人びととの比較から生まれたものである。取分け、後者にはスキタイ人が数百年間にわたり東洋の草原の野蛮人遊牧民の原型だった。２番目の対照的な用語は言語からではなく居住地から派生した。即ち、「野蛮人」savagesはラテン語の「森」を意味するsylvaから生まれ、 都市部よりは森林地帯に住んだ人びとのことであり、また発見の時代にあっては、馬に跨がって大声で怒鳴るような東洋人というよりは西方へ乗り出したヨーロッパの航海者たちに出会うような人びとのことだった。
>
> （Stocking,Jr.　1987:10）

barbarianもsavageも日本語に移すなら、どうしても「野蛮人」になる。尤も、sauvageというフランス語をレヴィ＝ストロース流に用いるならば、「野生の」とニュアンスで使用できるが、これは語がどのようなコンテクストで読解可能かに関わってこよう。かのpensée sauvageも英訳ではsavage mindになるのであるから。ところで、ストッキングの「文明」に対立する用語として旧い歴史を保持しているこの二つの語彙の命運は、今日では笑い飛ばして差別語として葬り去られるものだろうか。勿論、人類学の世界に登場することはあるまい。一般の社会的環境の中でも、比喩的冗句としてなら使われるかも知れない。ただしかし、コトはそう楽観的には進みはしない。私が引用したストッキング自身が「発見の時代」などと無頓着に述べているではないか。Era of discoveryとはコロン（Colón, C.）に換喩されやすい「大航海時代」のことであろう。「現代の」人類学者がかような西欧中心主義の言語運用をしてしまうのである。「発見」discoveryは注意深く用いなければならない術語である。換言すれば、研究者といえども無意識的要素はコントロールできない。それほどエスノセントリズムは根が深いと言うべきであろう。

さて、私がprimitive; barbarian; savageといったコトバを引き合いに出して注目したのは、ヨーロッパ社会、それも19世紀のイギリス、いわゆる「ヴィクトリア時代」に顕著に浮上した観念、として必ずしも把握しているからではない。ストッキングが言うように、barbarianもsavageも旧い。primitiveはクーパーが精力的に人類学的コンテクストに取り込んで語ったが、それもダーウィンの『種の起源』（1959）やメインの『古代法』（1861）に象徴される進化主義の潮流に則してprimitive論を展開しているに過ぎない。近著でprimitiveをsavageに置き換えている点には既に触れた。更には、上記の*Victorian Anthropology*では一章を割いてヴィクトリア期の「文化イデオロギーと野蛮（savagery）のイメージ」として解釈を施しているのであるから、これらの語はcivilizedあるいはcivilizationの対立語の類語セットと考えてよい。まさしく、それは進化論の認識図へと「過去＝未開＝野蛮」として糾合され、文明の眼差しによって分節化され、「地」として措定さ

れたのである。言い換えれば、「未開社会」primitive societyは、ヨーロッパ社会の過去としてテクスト化されたのであって、非ヨーロッパ世界は遅れた、文明以前の、しかも一方では文明の手垢が付着していない、「自然」の地域としてヨーロッパ的時間へと組み込まれたのである。

ここでsavageの原形がラテン語のsylvaであった点に注意を喚起しておきたい。なぜなら、sylvaが森林を意味し、その森林を切り拓くことが文明への途だったからである。とすれば、「森の向こう」は一体どのような眼差しを受容しなければならないであろうか。そしてわれわれは19世紀進化論を本当に乗り越え得たのだろうか。おそらく今日多くの人類学者たちは、進化論的言説はしない。ところが、今日の日本では「進化」は頻繁に新聞やTVで使われるではないか。進化は進歩以上に耳目に親しいものとなっている。人類は森林を切り拓きながら、他方で森林＝自然を再生しようとする。自己に都合の好い自然の再生、そこには文明人が住むのであろう。

V

人類学をアカデミズムの制度として創始体現したのはタイラーである。彼はオックスフォードで初めて人類学の教授になった。それは1896年のまさに世紀末であった。人類学の歴史に独自のアプローチを試みているカクリック（Kuklick,, H.）によれば、タイラーは博物館長、講師を経て人類学教授になった（Kuklick　2008:52参照）。そしてその翌年*Dracula*が出版されたのである。著者ストーカー（Stoker, B.）はアイルランド・ダブリン出身の座付きマネージャーである。この小説を吸血鬼フィクションの嚆矢とする文学上の評価は余り大きな意味をもたない。尤も後述するように、日本語訳題名『吸血鬼ドラキュラ』は英文学史の中でまともな文学作品として扱われてこなかったようであるが。本稿での関心では、差し当たって次の書き出しの部分が俎上に載る。少々長い引用になるが、テクストとしてこの長さはやむを得ない。

> ロンドンをたつ前、しばらく自分の自由になる暇がとれたので、大英博物館へ行って、トランシルヴァニアに関する参考書と地図をあさった。あちらの国の貴族とつきあうためには、まずその国の予備知識を仕込んでいくにかぎると思ったからだ。先方から言ってよこした場所は、むこうの国でいうと、いちばん東に寄ったはずれ、―　つまり、カルパチア山脈のなかの、トランシルヴァニア、モルダヴィア、ブコヴィナ、この三つの州のちょうど境目にあたる所だということがわかった。ヨーロッパのうちでも、文明にもっとも遠い、世間に知られていない地方である。
>
> （ストーカー　1971［1897］:7、傍点関）

ストーカーが現在ルーマニアに属するこの地域の情報はかなり精確に知っていたのは確かである。主人公のジョナサン・ハーカーのようにストーカーも大英博物館へ行って情報収集を行なったのである。そこで、「ドラキュラ伯爵」の依頼で弁理士ハーカーが遥々トランシルヴァニアまで出向いたのである。ストーカーはかの地がヨーロッパの内部ではあるが、「文明にもっとも遠い」地方であると、当時の知識人であっても保持したであろう「偏向」を示している。人類学者もこの見解に賛意を表明したであろう。物語の舞台をトランシルヴァニアに設定したのは重大な意味、即ち単なる固有名詞以上の効果が隠されていると推測しても、牽強付会とは思われない。というのも、トランシルヴァニアTransylvaniaとは英語で表記すればland beyond the forestとなるからで、まさしく文明に対立するsylva=forestの「向こう」の地を意味することになる。savageが住むところなのだからだ。

ストーカーは追い討ちをかけるように、言う。

> ある書物によると、世界中のこれはという目ぼしい迷信は、すべてこのカルパチア山脈の馬蹄形のなかに結集されており、その状（さま）、あたかもこの地方が人類の妄想の渦の中心をなしている観あり、といってあるが、だとすると、今回の自分の滞在はすこぶる興味津々たるものになるだろう。
>
> （ストーカー　1971［1897］:7-8）

トランシルヴァニアは遠い。勿論のこと、物理空間的以上に心理イメージ的に遠くなくてはならなかった。だからこそ「世間に知られていない」馴染みがないことも強調される。しかも、貴族のような支配階級が存在する社会でなければ、主人公の形象が造り出せない。この場合primitiveあるいはsavageの段階が考慮の対象となってくる。トランシルヴァニアは、ストーカーの時代にはオーストリア＝ハンガリー帝国の一部であった。複数の国家政治史に登録されるような地帯であったのだ。初めて「歴史的ドラキュラ」historical Dracula、即ち、ダブリン生まれの座付きマネージャーが書いた吸血鬼小説を、実在した「ヴラド串刺し公」との関連で、学問的コンテクストに置いたと評価された（Carter, 1988:1～参照）、ローナイ（Ronay, G.）はこう述べる。ストーカーが舞台をトランシルヴァニアに設定したことに関して、である。「これは賞賛すべき選択だった。ストーカーはそのことには朧げに気付いていたにすぎないが、異教的宗教慣行、迷信及び伝説の記憶が今なお社会に存続しており、カルパチア渓谷には詰め込まれているのだ。それは一千年も前にハンガリーの部族がトランシルヴァニアに押しかけて以来の古さである」（Ronay　1972:63）。トランシルヴァニアの歴史的・民族的要素が複雑に絡まった地域の特性を小説の中に取り込んだ手腕を高く評価する。ローナイはトランシルヴァニア生まれであるから、あるいはそのことが微妙に影響しているかも知れない。ともあれ、ヨーロッパ人からの眼差しを先取りしてテクスト分析を行うローナイの『ドラキュラ』体験に対し、もう一方の「歴史的ドラキュラ」研究に先鞭をつけた（Carter 1988:1～参照）『ドラキュラ伝説』（[7]原著1972）も注目すべき著作＝テクストである。ただ、西欧語を母語とすると、却ってエティモロジーに無頓着である場合も見られる。語源に拘るのは深読みという謬見を齎す懼れなしとは言えないが、「脱構築」という技法を尊重するならば、深読みも結果の当否とは違った次元の可能性の問題なのだ。

TransylvaniaはLand beyond the Forestであった。繰り返して言うが、森林＝自然の観念連合を軽視してはならない。「文明」の世界とは隔絶した、怪しげな迷信や慣習などが「残存」している異郷として、ストーカーの生きた時代の産業主義が主導する社会の原理、即ち18世紀のフランスに代表される一群の「啓蒙主義」思想家たちから引き継いできた原理、これに抗うゴシック小説を含んだ広い意味でのロマン主義的精神の伝統はそれらの異郷を希求した。実際、活動は活発だったのである。それらの一見反進歩主義、あるいは反進化主義的眼差しは、しかし、社会の文明化の進展を前提とした合理主義思想の裏返しに過ぎない。成る程、それは時代の進行とは誰にも止められない実体として感得されたものであろうが、明澄なる世界観ばかりで世の中がテクスト化されているとも考えにくい。世紀末のデカダンはsavageを呼吸したがっていたのではあるまいか。

ところで、『ドラキュラ伝説』の著者マクナリー＝フロレスクは、ローナイとは異なり、歴史的ドラキュラとしてのヴラド３世串刺し公の知識がかなりあったと見ており、その君公とドラキュラと呼ばれた人物が同一であることを知っていたとする（マクナリー＝フロレスク　1978:249-254参照）。ここではこの問題には深入りしない。ただ、「森の向こうの

国」には吸血鬼伝承なるもの、つまりいわゆる超自然観の類が受け継がれている点に関して、フレイザーを引き合いに出しているのは、注目されよう。ストーカーがフレイザーを読んだ証拠はない。引用されているのはかの『金枝篇』ではなく[8]、ストーカーの死後に出版されているものであるから。が、フレイザーは時代相に見合った進化論的テクストを生産し続けている。タイラーがオックスフォードで人類学の教授になったように、遅れてケンブリッジの社会人類学教授になる。呪術や宗教に関するフレイザーの著作は広く読者を得ていたのである。フレイザーはケンブリッジの恵まれた、安全な環境の中で過していながら、「フレイザーの著作に対する大衆の驚くべき反応が示しているのは、人類学には人びとの想像力に強力に作用し続けることができることだった」（Kuklick, 1991:8）と、カクリックに言わしめている。ストーカーも善き読者の一人になったであろう。

Ⅵ

さて、トランシルヴァニアは、西欧人が名付けた漠然とした地域のラテン語名であった。従って、様々な呼称が存在する。ハンガリーではErdélyと呼ばれる。現在この地域はルーマニアに属し、Ardealと呼ばれている。言うまでもなく、呼称とは常に関係性の問題である。では、この地域の呼称はハンガリー語とルーマニア語ではどのような意味になるのだろうか？Erdélyはトランシルヴァニアとほぼ同一の意味である。但し、このコンテクストで重要なのは、「森」の表象であった、と私は述べてきた。civilizedとprimitive, savageとを分かつ森である。要するに、「森の向こう」とは周縁あるいは辺境と同義である。いや、トランシルヴァニアは「人でなし」が住む異界と少々手垢の着いた表現も可能だろうか。それとも、我々は「西欧」あるいは「ヨーロッパ」の眼差しなどと気楽に言い過ぎるのかも知れない。西欧の範域が画定されたことはなかったのだからである[9]。そうであるとしても、「西欧」を人びとは常に都合良く「中心」として利用してきたし、また彼らもまた世界の頂点に在ると、少なくとも19世紀のイギリス人は自負したであろう。尤も、ストーカーはアイルランド人である。歴史的あるいは民族的な面では、単純に大英帝国の人間とは言えない、マージナルな意識はあったのではあるまいか[10]。重要な視点ではあるが、ここではこれ以上触れない。それにしても、ハンガリー語でもルーマニア語でも西欧ラテン語の呼称を引き継いでいるのはどうしたことであろうか。

近年のドラキュラ研究の中心的人物の一人であるミラー（Miller, E.）に依れば、「この名前は、９、10世紀の記録まで遡り、東部及び南部カルパチアとアプセニ山脈に囲まれた土地を示していた」（2005:75）。勿論、ストーカーが文学の舞台にトランシルヴァニアを設定した最初の人物ではない。旧くはシェイクスピア『ペリクリーズ』（1609）にトランシルヴァニア人への言及から始まり、その後文学作品には物語の重要な要素として登場したのである。従って、19世紀西欧では少なくともこの地名はかなり一般に知られていたであろう。「トランシルヴァニアは超自然的物語に相応しい舞台として十分に確立していた」（Miller 2005:78）のである。更には、まさにヴィクトリア時代のイデオロギーが明確に噴出した「旅行家」たちの記述をミラーは採り上げる。

> ヴィクトリア時代の旅行家は、習慣的に読者には西欧の進歩、即ち科学や文明と、東洋の未開性primitivism、つまり迷信と野蛮性barbarismとの不愉快な比較を提供した。トランシルヴァニアは、このような説明の中では、遠さでも奇妙さでも双方の面から記述されてしまうのだ。
>
> （Miller　2005:78）

ミラーは以下旅行家たちの当時らしい「見事な偏見」の表現を陳列して見せる。これではストーカーの『ドラキュラ』が吸血鬼小説でなくとも成功したのではないかと思わせる。迷信の最たるものとしての吸血鬼伝承を文学テクストに取り込んだのはストーカーの独創ではない。イギリスの伝統の中には、18世紀の後半以来のゴシック小説の系譜があり、それが19世紀ロマン派の潮流に乗って『フランケンシュタイン』と『吸血鬼』を産み落とした。産業革命の進展が一方では、伝奇文学を活性化したのである。この現象は驚くに当たらない。つまり、大英帝国も自己のコスモスを安定化すべきカオスとしてのsavageを必要としていたのである。

それでは、この19世紀末に爆発的人気をもって読者に受け容れられた『ドラキュラ』の引き摺っているコスモロジーは今日払拭されたのだろうか？ドラキュラ言説の二重性がここにある。ここで、19世紀的進化論のイデオロギー下で、呼応する人類学的言説と怪奇フィクション流言説の西欧的「眼差し」が、21世紀（これもいわゆる西暦であるが）のどのように変容しつつあるのかを展望しながら纏めてみよう。「ドラキュラ現象」の意味するもの、という視野からこの問題に接近してみる。

Ⅶ

さて、ドラキュラは歴史上の人物であり、従って実在した。しかも、彼は小説上の主人公でもあった。その作者がブラム・ストーカーであることも周知の事実であろう。しかしながら、ドラキュラがルーマニア史の一角を担う歴史的形象であるならば、これほど有名にはならなかったに違いない。実際のところ、ドラキュラが15世紀のワラキアWallachia公国の君主として実在した「歴史事実」がどれほど広く認識されているかも定かではない。但し、研究者の知的関心が昂じているのは確かなようである。

既出のドラキュラ学者ミラーは、そのことに触れている。彼女は文学研究者であるから、まず当然のことながら*Dracula*というテクストへの文学的関心の意義に注目するのである。「吸血鬼文学に関する論文が主要な学問的な雑誌や定期刊行物にコンスタンドに掲載される一方で、ストーカー並びに『ドラキュラ』に就いての論考（そして吸血鬼現象一般に関する）は、学会でごく普通の出来事になっている」（Miller 2005:160）と今日の状況を概観し、しかし、このような隆盛（？）は極めて新しい傾向であって、1970年代になるまでは学界は『ドラキュラ』にさしたる関心は示さなかったと白状している[11]。この原因を探るのに困難はなかろう。誰でも見当を付けることができる。

> 『ドラキュラ』がまじめに受け取られるには、学問風土が変わらなければならなかった。『ドラキュラ』がかくも長く無視された理由の一端は、怪物など批判的分析に値しないといった文学研究者たちが肯定したくないような類の作品として軽視されたことによる。つまり、彼らはかような化け物は民俗研究家や、「大衆文化」という怪しげな領域に道楽半分に関わるその他の「周辺的」学者に任せようとしたのだ。
>
> （Miller 2005:160-161）

こういう事態は、ある意味で当然であろう。1995年に立ち上げられた「世界ドラキュラ会議」（World Dracula Congress）以来ルーマニアの国内では「西欧」の急激な関心の高揚は、奇異に映りながらも一方では、観光資源としての思惑が交錯する。西欧の眼差しには過敏に反応する論者もいるのも至極当然のことのようにもみえるのだ。なぜなら、この国際会議自体に宿る視線の危うさを感知したからに他ならない。第一回の報告者に名を連ねたミラー自身が紹介している。

それは直接的にはドラキュラ観光に向けての皮肉たっぷりの、ルーマニア人新聞コラムニスト、パレル（Paler, O.）のコメントであったが、「西欧人」ミラーも新奇なるものを探し求めるツーリストと同然の如く見做されるのは会議参加者の真意ではなかったであろう。しかし、パレルの辛辣なそして切実な諧謔に耳を傾けなければなるまい。「好むと好まざるとに拘らず、われわれは『ドラキュラの国』なのだ。だから外国人の無知や無関心に傷つけられたわれわれの尊厳を育成しよう」（Miller 2005:157に引用。以下パレルの言葉も同じ）、とコラムニストは言う。この引用部分はツーリズムに対する揶揄として一応理解できるが、彼の鉾先がこの会議そのものに向けられたとき、ミラーは研究者の「良心」が疼く。この表現は少々誇張した嫌いがあるが、さりとてドラキュラ学者ミラーの意識を忖度するならば、左程不自然な見解ではないはずだ。それくらいこのテーマは学問的眼差しから縁遠い、厄介な「代物」だったのである。いや、現在も進行形であろう。

パレルが続けて「ドラキュラはルーマニアの神話ではない。われわれに押し付けられた神話なのだ」と叫ぶとき、彼は今日色褪せた用語に零落してしまった「神話」mythの意味を原初的な次元で捉えていたのであった。とすれば、彼が目論だのは単なる商業的ツーリズム批判では済まないのは明らかではあるまいか。ミラーはこの世界会議を主催した「トランシルヴァニア・ドラキュラ協会」（the Transylvanian Society of Dracula）の商業主義に与したと勘ぐられるのも本意ではなかろうが、この潮流に乗ったのも否定しがたい。この一大イベントは日本でも大きく取り上げられた。例えば、朝日新聞は「外貨吸い上げ狙ってます」という大見出しのタイトル（1995年５月27日付け夕刊）で会議（学会）を紹介する記事に紙面を割いている。明らかに、揶揄する姿勢を読み取ることができる。記者はこの協会の設立目的と性格を描写しつつ、1989年にルーマニアでも起こった共産党政権の崩壊以降、手のひらを返すように「ドラキュラ狂想曲」を奏したルーマニア側の事情を説明する。そして「二十五日から五日間にわたる初の世界学会も、プロモーションの一環だ」と「世界ドラキュラ会議」の開催理由も明確に指摘している。吸血鬼イメージを嫌ったという「過去」と訣別して、新ルーマニアの観光業者たちが「ドラキュラ＝吸血鬼」を世界に大々的に売り込もうとする商業主義を単純に笑うわけにはいかない。それはある種の必然だったからである。

ルーマニア国内にもある種のアンビヴァレンツを生み出したことになり、経済の活性化の手段としてこの会議を開いたトランシルヴァニア・ドラキュラ協会がある一方で、この「から騒ぎ」に戸惑う人びとも居たのである。そこで、記者は「はしゃぐ外国人　地元冷静」と「小見出し」を付けることになるのである。この「はしゃぐ外国人」の中にミラー自身が登録されているのではないか、という冷やかし気分も私などは感じてしまうのだ。実際、記者はミラーの言葉を披露している。そのまま引用する。「外国人だけが興奮しているのはわかっています。でも、楽しいじゃありませんか」。

引用という技法には常に内在する危険がある。朝日新聞の記者（宮田謙一）は、ミラーの言葉をどのような状況あるいはコンテクストで採取したのか。個人インタヴューであったのかあるいは記者会見だったのか。言葉はそのままなのかあるいは要約したものなのか。記者がミラーの言葉を掲載した意図は如何なるものと推測しうるのか。と、こういった疑問が沸々と湧いて来るのだ。このような引用による再現の危うさを十分に勘案しながらも敢えて言っておきたい。この記事のコンテクストでは、「協会」と会議参加者の思惑が一致しているが、地元の住民たちにはピンと来ない状況と読める。とすれば、ドラキュラの生家があるとされるシギショアラの土産物店の店員に依る呟きを軽く聞き流してはなるまい。つまり、「吸血鬼＝ドラキュラ」表象をこの女店員は周知のイメージと認知してはいないのである。それは新聞のコラムニストの認識に繋がるものではなかっただろうか。要するに、

この「戸惑い」の遠因には、ドラキュラと吸血鬼を連合させる根拠がないこと、またあのヴラド３世（Vlad Ⅲ）とドラキュラ公が同一人物とは描きにくいこと、が挙げられる。少なくとも、ルーマニアの歴史上の一隅を占めるヴラド公は「ドラキュラ」として周知の形象とは言い難かったのではないか[12]。

さればこそ、パレルの「押し付けられた神話」という苦々しい感情吐露が意味を尖鋭化する。共産党政権下の情報管理という条件があったとしても、「吸血鬼であるドラキュラ伯爵」を歴史上のヴラド３世へと重ね合わせた像を創出したのは、西欧社会のストーカーであったのは確実であろう。そして、こともあろうに15世紀のワラキア公は吸血鬼だったというのだ。従って吸血鬼信仰の「残存」などと迷信深い野蛮な国と思われるのは、その国の住民にとっては愉快ことではなかろう。かつてかのヴォルテール（Voltaire）が吸血鬼のニュースに慨嘆したのは18世紀のことだった[13]。それが200年も経った現代（1995）においても、吸血鬼をネタにして観光客を誘致し、国際会議まで開催するとは、人類の合理精神はいかに停滞してしまったのか、と「今日のヴォルテール」は叫ぶだろうか。

私には実はこの「会議」の開催と報道のあり方そのものに、「ドラキュラ問題」the Dracula Issuesという格好な人類学的テーマが潜んでいると思われるのだ。まさしく西欧的眼差しが生み出したある神話テクストが更新されようとしている。しかしながら、この「眼差し」を投げ掛けた最初の人間はアイルランド人ストーカーではあり得ない。言い換えれば、『ドラキュラ』が創作したフィクションとして現実的、歴史的コンテクストから、この眼差しを切り離してしまうのも一面的な解釈であろう。なぜならば、いかに架空の虚像が肥大化したとしても、ドラキュラは実在の人物としてワラキア周辺の人びとに認知されていたからである。但し、その時代の情報の精確さをここで見極めるのは甚だ困難である。おそらくそれは、映画『羅生門』で黒澤が表現しようとしたこととは些か異なると言わなければならない。つまり、「視界の相互性」というよりも、伝達過程に内在する「受容」のデフォルマシオンの問題である。例えば、サクソン人の間では、ドラキュラは悪名高き君主として噂話の対象となっていた。これもある種の虚像である。但し、ドラキュラがヴラド３世であり、「串刺し公」Vlad　Ţepeşであることの認知度は、頗る不確定のままである。この錯綜として複雑怪奇さから「ドラキュラ現象」は当分抜け出られないのではあるまいか。

件のパレルは直言する。

> 私はまた疑っているのだ。この世界会議の参加者たちが、すすんで真面目な歴史家に耳を傾け、ドラキュラの伝説が歴史的現実を麻痺させ、偽造したことに同意するのかどうかを。吸血鬼研究家は「吸血鬼を」欲しているのであって、真実ではない。

要するに、20,21世紀になっても、かくの如きコスモロジーは簡単に乗り越えられないようである。

注

1　モレッティ（1992:32）。

2　『ドラキュラ』の原著はただ*Dracula*である。邦訳は『吸血鬼ドラキュラ』になっている。つまり、この表示は小説を指す。

3　関（1979）参照。

4　Kuklick（2008:53）；Stocking Jr.（1987:243-244）参照。

5　富山（1995）。

[6] Huxley lecture,14 December 2007.
[7] マクナリー＝フロレスク（1978）。
[8] マクナリー＝フロレスク（1978：253-254）参照。
[9] フォンタナ（2000：15）参照。
[10] この微妙でアンビヴァレントな意識については、例えば、丹治（1997：67-71）参照。
[11] Carter（1988：10）参照。
[12] 今日では「脱ドラキュラ」キャンペーンの風潮が一方で生れているようである。「ドラキュラ城追われる」『朝日新聞』2009年10月15日付け朝刊参照。
[13] ヴォルテールが『哲学辞典』（1764）の「吸血鬼」の項目でのこと。

参照文献

Carter, M. L.（ed.）1988. *Dracula: the vampire and the critics*. Ann Arbor/London: U・M・I Research Press.

Florescu, R. & McNally, R. T. 1989. *Dracula, Prince of Many Face: his life and his times*. Boston: Little, Brown & Company.

フォンタナ,J. 2000.『鏡のなかのヨーロッパ：歪められた過去』立石博高・花方寿行訳、原著1994.

Kuklick, H. 1991.*The Savage Within:the social history of British anthropology,1885-1945*. Cambridge: Cambridge University Press.

_____（ed.）2008. A New History of Anthropology. Malden: Blackwell Publishing.

Kuper, A. 1988.*The Invention of Primitive Society*. London & New York: Routledge.

_____2008. Changing The Subject—about cousin marriage,among other things.Journal of the Royal Anthropological Institute 8N. S.）14,717-735.

Hodgen, M. T. 1964. *Early Anthropology in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Harris, M. 1968.*The Rise of Anthropological Theory*. New York :Thomas Y.Crowell Company.

マクナリー, R. T. ＆フロレスク, R. 1978.『ドラキュラ伝説：吸血鬼のふるさとを訪ねて』（矢野浩三郎訳）、角川書店。原著1972.

モレッティ, F. 1992.『ドラキュラ・ホームズ・ジョイス』（植松みどり他訳）、新評論。原著1988.

森野たくみ　1997.『ヴァンパイア：吸血鬼伝説の系譜』、新紀元社。

Miller, E. 1998. *Dracula：the shade and the shadow*. Westcliff-on-Sea：Desert Island Books.

_____2005. *A Dracula Handbook*. Toronto: Xlibris Corporation.

Pels,P. & Salemink,O.（ed.）1999. *Colonial Subjects: essays on the practical history of anthropology*. Ann Arbor :The University of Michigan Press.

Riquelme, J. P.（ed.）2002. *Dracula*.Boston: Bedford/St. Martin's.

Ronay,G.1972. *The Dracula Myth*. London & Sydney: Pan Books.

Rupp-Eisenreich, B. 1984. *Histoires de l'anthropologie:XVI－XIXsiècres*. Paris: Klincksieck

関　三雄　1979.「人類学的思考あるいはロマン主義の精神：思想史的素描」『社会学年誌』20号：79-95頁。

_____1994.「寓意上のトランシルヴァニアにおけるコスモロジカル・コンテクストの生成—吸血鬼伝承異論：『まなざし』の文化的位相—」『山陽学園短期大学紀要』第25巻：

59-73頁。
ストイチェスク，N. 1980.『ドラキュラ伯爵のこと』鈴木四郎・鈴木学訳、恒文社。原著1978.
Stoker, B.1979［1897］. Dracula. London: Penguin Books.
Stocking Jr., G. W. 1987. Victorian Anthropology. New York: The Free Press.
ストーカー, B.1971.『吸血鬼ドラキュラ』平井呈一訳、創元社推理文庫。原著1897.
丹治　愛　1997.『ドラキュラの世紀末:ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』、東京大学出版会。
富山太佳夫　1995.『ダーウィンの世紀末』、青土社。
Treptow, K. W.(ed.)1991. *Dracula: essays on the life and times of Vlad Ţepeş*. New York: Columbia University Press.
Twitchell, J. B. 1981. *The Living Dead*. Durham, N. C.: Duke University Press.